



「すべりこみセーフのコンサート」 青柳いづみこ (ピアニスト・文筆家)

2009年の5月、養父市八鹿町の宿南小学校でコンサートを開いた。

当初は、前年に亡くなった母の追悼として、かやぶき屋根の家にピアノを運び、お世話になった方々をお招きして聴いていただこうと思っていた。

しかし、かやぶき屋根のコンサートを開いていたところと違い、家も県の文化財に指定されている。ピアノがかなり重い上に、たくさんのお客さまではとても床が支えきれないだろうと、なかなかむずかしいという結論になった。

それでは、近くの小学校のミーティングルームを貸していただくかと交渉していたら、校長先生から、是非わが校の児童や幼稚園の子どもたちにもきかせたいというお話が出て、急遽体育館で開催することになった。それも、学校の行事だから午前中。

ずいぶん違う話である。

母をしのんでしっかりと曲を弾こうと思っていたのだが、子どもたちからのリクエストで『崖の上のポニョ』と『トトロ』から「さんぽ」を弾き、いっしょに合唱することになった。『小犬のワルツ』もある。少しは本格的な曲を、と思って、自分が小学校五年生のころに練習していたシューベルトの『即興曲』も入れた。母をしのぶ曲としてはドビュシーの『月の光』。

当日ははしと雨がふって、五月なのに寒い日である。ピアノの鍵盤が冷えきっているので、ストーブを置いていただいた。子どもたちは床の上に並んで座り、付き添いの父兄や宿南地区のお年寄りもうしろのほうに座ってくださった。

みると、皆さんマスクをしている。

「ん？」

なんと、その朝八鹿高校の生徒に新型インフルエンザの患者さんが出たので、マスク着用が義務づけられているとのこと。私はマスクをしてピアノを弾くわけにもいかないし、トークもあるので免除していただいた。

子どもたちも、『ポニョ』や『トトロ』を歌うときだけはマスクをはずし、元気に歌ってくれた。大きな口をあげ、リズム感もよく、音程もしっかりしていたし、何よりよく声が出ているので感心してしまった。最後にしっかりと『月の光』でしめくり、控室に戻ってきたところで、ニュースが飛び込んできた。新型インフルエンザで一週間休校、その日の午後からすべての行事は中止。

すべりこみセーフで演奏したふるさとのコンサートは、忘れられない思い出になった。

(「ふるさとで弾くピアノ」は今回で終了します)



児童から花束を受け取る筆者

青柳いづみこ ピアニスト・文筆家。CDに『ドビュシーの時間』『天使のピアノ』（いずれもカメラータ）。著書『翼のはえた指』（白水社）で吉田秀和賞、『青柳瑞穂の生涯』（平凡社ライブラリー）で日本エッセイストクラブ賞。2009年刊の『6本指のゴルトベルク』（岩波書店）にて講談社エッセイ賞。近著に『指先から感じるドビュシー』（春秋社）。大阪音楽大学教授、青山学院大学講師。日本ショパン協会理事。オフィシャルHP: <http://ondine-i.net>